

生活者の視点から、市場経済の基礎や金融のしくみを分かりやすく解説します

川元 由喜子 Kawamoto Yukiko **経済に強いママを増やす会主宰**
1985年日興証券(株)入社、1987~1992年ニューヨーク勤務。1995~2003年HSBC投信投資顧問(株)。2009~2016年ありがとう投信(株)。2010年より「経済に強いママを増やす会」主宰。草の根金融教育活動に注力。

金融と金利



私たちは、好むと好まざるとにかかわらず、誰でもお金を使って生きています。働いた分だけ給料をもらい、その範囲内で使う……というだけならば話は簡単ですが、お金の働きはそれにとどまりません。使わなかった分を貯めて将来に備えたり、貯めるだけでなく貸したり投資したりすることもできます。また逆に足りない分を借りて、将来もらう分を先に使うこともできます。そこで、お金と上手に付き合うために必要になるのが、「金融」の知識です。

金融とは、ごく簡単にいえば読んで字のごとく、お金を融通することです。お金が貯まっているところから、お金を必要としているところへうまく流れるように、金融のシステムが働いているのです。あなたが貯めたお金は、多分銀行に預けられているのではありませんか？ それを銀行が自分たちの采配で、お金を必要としている先に貸し付ける、こういうかたちは「間接金融」と呼ばれます。銀行のような金融機関が間に入ってお金の流れを作るからです。

これに対して「直接金融」というのは、例えば株式や債券を指します。お金を持っている人が、株式や債券と引き換えに、お金を必要としているところに直接お金を動かすからです。このとき、取引を行う証券会社は仲介をするだけであって、どこへお金を融通するかは、株式や債券を買う本人が直接決めているのです。

より多くの人になじみがあるのは「間接金融」のほうでしょう。ほとんどの人が、銀行口座を

持っていますね？それは、間接的にどこかに資金を貸し付けている、というわけです。

お金を貸し付けると、その対価として利息を受け取ります。貸し付けた金額に対する利息の比率を「金利」といい、普通1年間でもらえる利息をもとに計算される「年利」が使われます。例えば100万円預けて、1年後に1万円もらえるのであれば年利1%です。預ける期間が3カ月であれば、もらえるのはその4分の1の2,500円ということになります。

金利はどうやって決まる？

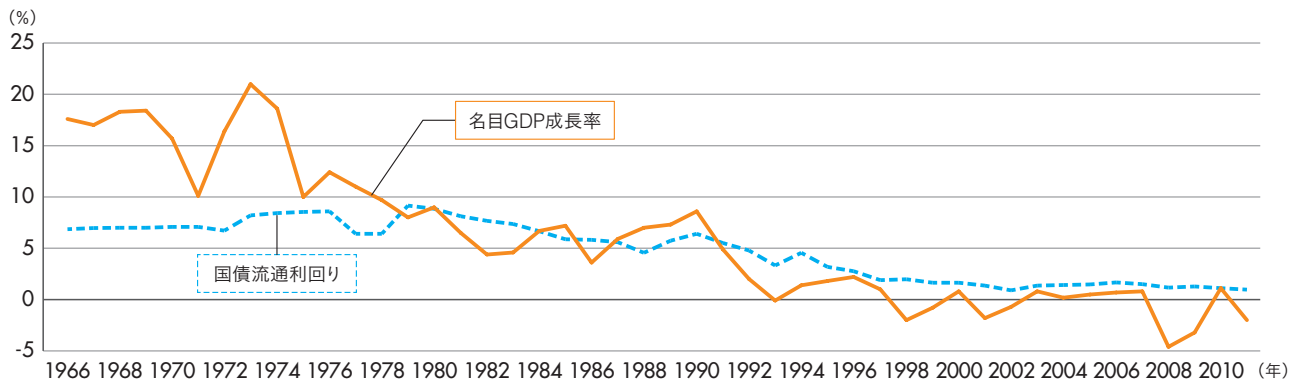


お金を貸すと、どうして利息がもらえるのか、考えたことはありますか？

お金を持っている人は、それを使って自分でお金を稼ぐことができます。商品を仕入れて売ることもできるでしょうし、材料を買って物を作ることもできるでしょう。土地があれば、苗を買い、農作物を作って売ることもできます。しかし持っているお金を誰かに貸してしまうと、自分ではお金を稼ぐことができなくなります。だからその分、利息をもらうのです。

今は、身の回りで簡単に利益の出るビジネスが見つかるような状況ではありませんから実感が湧かないと思いますが、もし経済が高成長していて、道端に商品を並べていればすぐに売れるような経済であれば、お金を人に貸したりせずに、自分でひと稼ぎしようと試みる人は多いのではないのでしょうか。そんな景気がよい状況を想定すると、多分お金を借りるのは大変です。でも目の前にひと稼ぎできるチャンスが転がっ

図1 経済成長率と金利の関係



内閣府統計資料、日銀統計資料をもとに著者作成

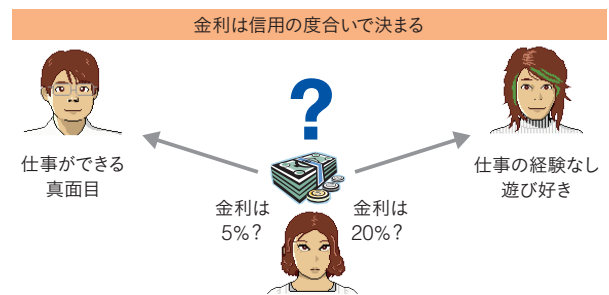
ているのですから、少々高い利息を払ってもお金を借りたいと、きっとあなたも思うでしょう。そんなとき、金利は高くなります。金利は経済の強さ、景気の影響で決まるのです。経済が強いときに高く、弱いときに低くなります(図1)。

金利はまた、物価の影響も受けます。物価がどんどん上がるのであれば、お金を持っている人は、人に貸さずに物を買って、じっと持っているのが得だと考えるでしょう。そんなときは、物価の上昇率以上に金利を払わなければ、借りることはできないはず。逆に、物価が上がらないときは、金利も低くなるのです。

金利が決まる要素として、もう一つ大事なことがあります。それは信用の度合いです。これまでに見てきた景気や物価といった要素は経済全般に共通ですが、金利はもちろん、貸し出す先によって変わってきます。あなたが自分のお金を誰かに貸そうとするとき、真面目で仕事の実績もある相手であれば、低い金利でいいから借りてほしいと思うでしょう。しかし、もし、遊び人で働いたことのない人物に貸さねばならないとすると、高い金利を払ってもらわなければ割に合わないと思うのではないのでしょうか。つまり、信用が高ければ金利は低く、逆に信用が低ければ金利は高くなるのです(図2)。

このように、経済や物価、そして信用の度合いで決定される金利が基礎となって、金融のしくみが働いています。

図2 金利と信用



債券と金利

今、身近な債券といえば、国債ぐらいしか思い浮かばないかもしれませんが、国債を買うということは、国家に直接お金を貸す、ということです。ですから貸し付けるのと同じように、利息がもらえます。例えば100万円で発行された債券で1年後に1万円の利息がもらえるならば、「額面が100万円、金利が1%の債券」です。それが例えば「5年物の債券」であれば、5年後に額面の金額である100万円が戻ってきます。これが「償還」です。

さて、この債券を保有している間に景気がよくなって、世の中の金利が上昇したとしましょう。すると債券には何が起こるのでしょうか。もちろん償還までじっと持っていれば、特に何も起こりません。しかし債券は、途中で売却することもできます。そのときに金利が上がっていると、債券の価格は買ったときよりも下がってしまっているのです。どうしてでしょうか。

それは、世の中で金利が上がっても、発行された債券に付いている金利は変わらないからです。例えば新たに発行される債券で1万2000円の利息がもらえるところ、あなたの持っている債券の利息が1万円ならば、残念ながらあなたの持っている債券は魅力がない、ということになってしまいます。ですから、世の中の金利が上がるとき、債券の価格は下がることになるのです。逆に金利が下がるときには、債券の価格は上昇します。

このように債券市場は金利の上下を反映して動きます。景気がよくなったり物価が上がったりすると、金利の上昇を通じて債券相場は下がり、景気が悪化すると、逆に金利の低下を通じて債券の価格は上がるのです*。

株式と株式市場

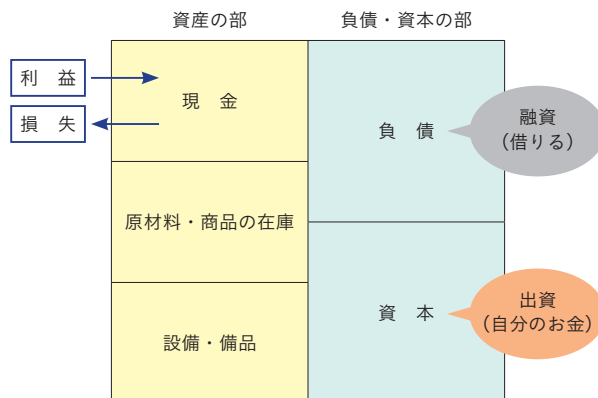


債券の価格が金利で動くのに対し、株価は主に企業の業績を反映します。株式を買うということは、その株式を発行する企業の事業に投資することだからです。

前回の「企業活動と経済」の中で、事業を始めるに当たって自分でお金を出すことが「出資」、そのお金が「資本」だと説明しました。図3はそのときと同じ図ですが、右下の「資本」の部分をもっと細かく分けて所有するのが「株式」です。「資本」の部分の資産価値、これを「純資産」といいますが、例えば「純資産」100億円の企業が、1億株の株式を発行していれば、1株当たりの「純資産」は100円ということになります(100億÷1億=100)。ですからこの企業の株式を1株所有している株主は、100円分の価値のある純資産を所有していることになるのです。

もしこの企業が事業で利益を上げると、その利益が企業の資産に加わり、資産全体が大きくなります。負債の大きさは借りたときに決まっていますから、資産全体が増えた分、純資産が

図3 企業のバランスシート



大きくなります。株式は純資産を所有する、ということですから、企業業績がよいと株価が上がるのです。また利益の一部は、配当として支払われます。これも株主の収入ですから、配当の額が大きければ、やはり株価は高くなります。

株価は短期的にはその日の気分で動いたりもするので、非常に心もとないように見えますが、ある程度長期にわたって見ると、しっかり企業業績の動向を反映して動いています。景気のよいときは業績のよい企業が多くなるので、株式市場全体も高くなり、景気の悪いときには安くなります。この「市場全体」の株価水準を表したものが「インデックス」で、日本の株式市場では「日経平均株価」と「東証株価指数」(TOPIX)が代表的なものです。

株式市場は、金利の影響も受けます。金利が上がるときは、株価は下がる傾向にあります。なぜならば、債券から得られる利息が増えれば、債券を保有することがより魅力的になるからです。株式を売って債券を買おうと思う人が増えるだろう、というわけです。また金利が上がると、それぞれの企業が借りている負債に対して支払う利息も増え、その分企業の利益が減ってしまうということも予想されるからです。このように、債券や株式などの金融市場は、主に景気や金利の動向を反映して動いています。

* ウェブ版「国民生活」2016年11月号「金融商品の基礎講座」第6回 公社債(債券)(1) http://www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-201611_12.pdf